

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2019.8.10
VOL. 76

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
http://www.tokyohomeless.com

新宿連絡会結成25年に寄せて

笠井和明

何年記念だとか、何年集会だとか、「あの日を忘れるな」的なものは、それこそ25年前に頻りにやったが、そう云うものは、だいたい自己満足で、ほとんど人など集まらず、活動家連中をがっかりさせたものである。

そんなこんなで、何年目かなどあまり気にせずその後はやっていたのであるが、あれよあれよと、本年2019年（令和元年）が、新宿連絡会発足25年目となった。

記念パーティをやるような柄ではないので。本号

をもって、四半世紀活動を続けて来たその記念（総括）にしようと思う。

新宿連絡会結成の日は1994年（平成6年）8月10日。

早稲田のとある集会場で結成会議を、二つの団体の主要メンバーと野宿当事者（仲間の会）で行なった。

そんな時は、たいがい「基調（案）」だとか、「資料集」を作ったりしたものであるが、どうも記録にないし、記憶にもない。

当時、山谷争議団の分裂的騒動など、この業界でいろいろと勢力争いがあった頃で、外部からの来賓も呼ばず内輪で、ひっそりで行なった記憶はある。

その頃、とても狭い新宿駅周辺だけで492名の仲間が数えられ、新宿区福祉部生活福祉課には延べ3,452名（8月）の相談（食料も含めて）が寄せられていた。平均年齢は連絡会調べで52.5歳。新宿には1年以内（つまりはバブル崩壊直後）に流れ着いた仲間が63%。圧倒的（73%）に無職。直前の仕事が建築関係の仲間が60%。残りは、工場、飲食、会社員、自営業と云う構成。まあ、東京におけるホームレス問題の黎明期であった。

連絡会結成後「屋根と仕事」を社会に求め、実現させようをスローガンに、すぐさま新宿区への総合要求運動を始めた。



連絡会はそう云う団体であった。孤立せずに仲間を作ろうと呼びかけ、仲間の会に組織し、路上生活と云えども当面は一緒に暮らすのだからと、自治の基盤を作り、それをベースに行政交渉を続け、生活の改善、そして「屋根と仕事」にがる施策や対策を勝ち取り、責任をもって、その事業もやる。最近の人々は、どこにでもある教会系炊き出しボランティア団体としか思っていないようであるが、実はそうではなく、生まれも育ちも、また正式名称（新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議）も、新宿生まれの、路上生活者の利益を代表する団体であるし、路上生活者が少なくなった今もそのスタンスだけは変えようと思わない。

しかし、当初、その行政要求と交渉の仕方が、今思えば、とにかく下手で、荒々しかった。

窓口で「がなっていれば」「机を叩いていれば」良い（まるでクレマーであるが）とし、マスコミを工作して社会に発信するは良いが、とにかく呼ぶことだけが目的化し（まるで「インスタ栄え」）、到底、及第点を貰えるものでなかったが、幸いに当時は「貧困ブーム」もなかった頃だけに、チャチャを入れる人々もたいしておらず、分裂するにも、せっかく纏まったものを壊す勇気もなく、何とか下手でも細々とやらせてもらっていたのだろう。

当時の仲間の平均年齢52.5歳は、つまり、戦後世代、団塊の世代。学生運動も労働運動も、右翼活動も暴力団も、それぞれの活動が華やかな昭和を駆け抜けて来たその責任世代でもあった。対する我々活動家は私でさえ30代前半。

三里塚闘争で見られたような「地権者」（当事者・農民）が、「支援の学生さん」を信頼し、関係

を深め、運動を紡ぎ出していく、そんな過程が新宿の地にも確かにあった。我々の先生は「先輩」であり、「先輩」から叱咤激励、アドバイスされながらどうにかこうにかやって来たとも言えるであろう。そう云う特殊な関係と云うのは、今、他の世界であるのかないか分からぬが、そう云う瞬間を感じただけでも生きてきた価値があると思うような歴史を、我々は歩んで来た。

それは「暴動」で対策を引き出した「寄せ場」とは違い、その自然発生的な不満であるとか、怒りであるとか、そう云うものに、拝跪するのではなく、その「先輩達」の意識性と云おうか、労働者としての社会的責任をもった常識性とも云おうか、社会性と云おうか、理に適ったレベルでの要求に留まり、それ以上（学問やら評論やら政治やら）に行くことへの躊躇も孕んでおり、そこが他の運動とはチト違うところで、まあ、今思えば、極めて特殊な時代の中の運動であり、おそらく、それは後には誰も続かないし、続けられない特異性と云おうか、奇異性と云おうか、時代性と云おうか、そんな都会の都市下層の運動であった。

下手な運動でも、この新宿の地では何故かぐいぐいと同調者が増え、何らかの対策をとの空気になり、我々にベースの所でどこか共感するような都職労の人々や、東京都や新宿区などの「この問題は何とかせねばならぬ」と都市問題と果敢に格闘した行政内部の職員（管理職の人々も）達のたたかきも引き起こし、そんな、良く分からない関係の中、東京都、特別区の路上生活者対策と云うものは、かつての隔離収容主義ではない、自立支援、地域福祉と云う流行の概念の中に流れ、やがて、当事者の声も聞くようになり、また、要望の嵐の中、改善も重ねられ、緊急一時保護センターや、自立支援センターの開設へと進み、それをベースにしなが、国へと立法化の道を辿り、「ホームレス自立支援法」と云うこれまたとても珍しい法律の制定にまで到った（路上生活者が百名規模で集まり国会の前やら周辺で幾度もデモしたり集会したり座り込みをしたのは後にも先にも最初で最期であった）。

そんな流れるような活動とは裏腹に、連絡会の歴



史を語る時、1998年（平成10年）2月7日の「ダンボール村火災消失事故」と、2月14日の新宿駅西口地下からの「自主退去」は、西口地下商店街や通行人なりにおおいに失望と不安を与え、また、迷惑もかけ、運動から見ても明らかな失敗例でもあった。死者まで出したことは、今なお、深い懺悔の中にある。

新宿の下層の歴史と云うのは、悲劇の連続で、ちょうど、その頃、1997年（平成9年）10月、新宿駅西口バス放火事件（1980年（昭和55年）の受刑者丸山さんは55歳で獄の中、首を吊った。それと同じよう、今や語られることもなく、振り返ることもない悲劇を、我々だけは、我々だからこそ背負い、生きていたりもする。

我々はこの街の中で、下層に生きる人々に何か希望を少しは与え、そして、与えてもらっただろうか？自立支援であるとか、生活保護であるとか、社会保障であるとか、そんなことじゃなく、生きる、生きていても良い希望を、仲間と共に支え合い、生きていける希望を紡ぎ出したのだろうか？

こうして思い出してみると、25年と言っても、目出度いのか、目出度くないのか、ひとつの区切りでしか過ぎないのか、それは、25年間、新宿の下層の人々の中に入り、見続け、共に生きて来た、特異な活動家の、只のため息であるとか、自己確認に過ぎないのであろう。答えなど分からず、結構まっすぐに進み続けただけで、その年月は、我々にとってかけがえのない年月であり、多くの仲間と出会い続け、そして別れ続けた年月でもある。

今どき、ホームレス支援団体を名乗っている団体で、宿泊を伴わない団体はあまり多くはないが、当時は路上生活の先の宿泊場所の確保にはとても苦労をした。仕事の方は景気が回復すればどうにかなるものであるが、下層の人々が東京の何処で暮らしていくのかは、地代高騰、土地転がしと開発がバブルであったよう、ここ、東京では、下層労働者の居場所は時代と共になくなるし、一時的なものは、すぐなくなってしまった。新宿で言えば、簡易宿泊所であったり、木賃のアパートであったりしたが、都庁

移転だ、高層ビルだ、再開発だ、六本木ヒルズだ、森ビルだ、の時代、（今はオリンピックだ、であるが）そう云う都市開発で木賃は取り壊され、それらの層の高齢化と共に宿泊所も生保対象に商売替えをし、それも規制がかかれば、今や民泊であったりと、インバウンドの方に足下を向けている。居場所共に慣れ親しんだ新宿の地からは追い出され、病院なり、施設なり、遠隔地へ、遠隔地と流れつくのが、新宿の地の下層の現実と云えば、現実でもある。まだ、戦後の遺産としての都営住宅があるので、良い方であるのかも知れないが、家族を単位として作られた場所は、単身者からすると、その距離は遠いし、キャパもまた圧倒的に足りない。

行政の隔離収容政策と云うもののかつて批判をし続けていたが、これは、行政が資本の側に向いただけで、資本の側、都市の側こそが、その根幹なのであろう。

金さえ出せば住むことが出来た木賃宿の発想、その時代でもまだ生き残っていた「寄せ場」の発想しかなかった我々は、新宿に来ることで、東京の最先端の住宅事情を目の当たりにすることが出来た。それを目の当たりにし、常にその問題意識を持ち続けて来たことが、我々が時代遅れにならなかった理由であらう。

我々は当面の居場所を、「ダンボール村」であるとか、「路上」であるとか、「テント村」であるとかに求めた。新宿の場合は当初、歩道で、しかも駅から都庁へと結ぶ通路で、当然のことながら管理権をめぐる攻防が続いていた。管理者からすれば、れを当面でも認める訳にはいかないし、とっとと出ていけと云うのがスタンスであるが、我々は、バブル



崩壊後の非常事態であるので、対策が整うまで当面で良いから居させてくれ、と云うスタンスを取った。結果、我々と、連絡会に集う路上生活者は「無法者」とされてしまうのであるが、「反対」のための「反対」を我々はしていたのではない。そこら辺は誤解されやすいところであり、マスコミもまた面白がって「ホームレスVS東京都」を煽るものであるから、新宿区との総合要求運動がその内にどこかへ飛んでしまい、連絡会結成の翌年から「動く歩道決戦」にのめり込むこととなる。そのクライマックスが、これまたとても分かり易い1996年(平成8年)1月24日早朝の東京都道路管理者による強制排除と、それへの大衆的抵抗の「1.24事件」であった。

そこまでしなければ分からなかったのが当時の東京都知事本部やら建設局の質であったが、また、そのことによって様々考えるようになったのも東京都(なかでも福祉保健局が)であった。その意味ではまったく無駄なたたかいではなかった。当時、このたたかいに「決戦」との言葉をつけたが、今ふり返ってみても、対策の方向性がこの時点から変わる、そんな「決戦」であった。

もちろんこう云う我が身を切る実力抵抗の流れの時は、打開策を探り裏で色々と交渉をするものである。当時の企画審議室の谷村さんとは、西新宿の喫茶店で時間をかけ、色々と語り合ったものであるが、力は及ばなかった。我々の側も打開策の解決案(私案)もあったのであるが、それを出すような交渉にはならなかった。正直に言えば、話しあいにはしていたが、それが纏まらず、お互い振り上げた拳をひっこめる訳にはいかず、こうなってしまった。と言うのが正しい。



この裁判は、大口先生を筆頭とする優秀な弁護団や救済担当の安江女史らが異様に頑張ってくれたおかげもあり一審無罪でもあったので、まあ、結果も含めて「痛み分け」。双方が同じ位、悪かったと言った所か。

我々はこの時も村が破壊されることに抵抗をしたのではない。ずっとその場に居たいと主張した訳でもない。多くの人々が納得する就労支援なり、生活支援なりがついた先の展望が見いだせる所なら、施設なり、何処にでも移動はしようと言いつつ続いていたが、何せ東京都は路上生活者対策などやったことはなく、山谷対策のよう暴動対策で年末年始は町の人々に迷惑かけちゃいかんとする大規模施設に短期間宿泊させる仕方しか思いつかなかった。当時、代替地として建設された橋がひとつしかなく管理しやすい「芝浦寮」(今はタワーマンションになり橋はいくつもついているが)も、地元の反対(ホームレスは嫌だと云う)を押さえプレハブ小屋を作るだけで精一杯。その仕組みは「やりながら考える」ところまでしかなく、あくまで、建設局の暴走に、福祉保健局が危機感を募らせ、世間体を整えるためにとっさに作ったとしか思えないような代物であった。事実、2ヶ月だけの運用でとっとと閉鎖。まあ、これが今やホームレス対策の花形施設である「自立支援センター」やら「自立支援システム」の原形でもある。

すなわち、ここで、山谷対策を継承した「なぎさ寮」と、準更生施設的な路上生活者を対象とした病気療養中間施設「さくら寮」と、自立支援付施設「芝浦寮」と云う、今の路上生活者対策の形を東京都はかなり早い時期に作っていた。

当時、排除者数は約200名に対し、入居者は79名。2ヶ月以内に56名が就職したとされていたが、自力で探したのが19名、残り37名が職安紹介、そのほとんどが、住民票も要らずに、携帯電話も要らない建設業現場労働なので、住み処は飯場寮。多くの人々はその後、契約が終わり、新宿に戻って来た。仕事が切れればまた野宿の構造を放置したままの「自立支援」なので、これはあまり評価すべき点はないが、その後の評価や批判もあり、路上生活者の自立支援、とりわけ就労支援は、しっかり

と準備をし、住民票が必要なら住民票を取り寄せ、資格が必要なら技能講習を実施し、面接技法も教え、探すならハローワークでの常雇の仕事、お金を貯めアパート転宅をするまでが「自立支援」であると言うことを、その後東京都も学ぶことになり、その学んだ結果が、現在の自立支援センターとなるのであるが、連絡会の歴史も、路上の歴史も、この、「施設、宿泊所問題（移転先）」を抜きには語れないし、路上生活者故に必ずかかわらざるを得ない問題で、対象者を福祉事務所やら街頭相談に連れていくだけでは終わらない、どこに行くのか、どこで新たな生活を作り出すのかと云う問題も含め、トータルな路上生活者対策やら支援の課題である。それを早い時期から提起し続け、連絡会の仲間は施設が出来る度に入所し続け、改善したり、交渉したりを繰り返し、提案もし、それでも飽き足らなく、NPOになってから自らで作ってみたいと、そんなことを続けている。

路上の問題とは中間施設やら居場所の問題（地域の問題）でもある。その両面をみておかないと、単に路上生活のままで長期に亘り「良し」とする、何だか何の支援なのか分からないような運動になる。今のままで良いのだから、今のままにしておこうでは、支援も運動も対策も、そこから生まれない。

もちろん、そう願っている人々もいるのであろうが、自然発生性に拝跪するだとか、しないだとか、何をなすべきだとか、なさないべきかだとか、その昔、もっと若かりし頃習った、そんな社会問題解決のイロハでもあり、路上の問題で云えば、人は路上で寝ない方が良くとする、普通の感覚でもある。

連絡会は当初、自ら施設、居場所を作ると云う点、またNPOを作ると云う点では、とても消極的であった。まあ、それは表から文句を言っていた方が楽し、格好いいし、マスコミ受けもするし、分かり易いし、であり、また、行政、福祉事務所やら道路管理者、公園管理者との関係も良好ではないどころか、敵対し続けて来たので、そうせざるを得なかった面もあったが、最初からそんな弁証法的な路線を敷いたとしても、成熟していない身故に、それは破綻していただろう。

東京都も路上生活者対策の体系が1999年（平成11年）12月、自立支援センター開設と共に作り出され、じき定着し、また「ホームレス自立支援法」でNPO法人等との協力が明記されたこともあり、そんななかで、行政とは対等な関係も作れるようになり、そこで、NPO新宿を作り、就労支援系の委託事業やら、独自事業による宿泊施設運営なども着手されることとなる。

路上でわめいていただけの団体が、ようやく路上生活者対策と云う支援の本丸に乗り込み、その場で活躍出来る環境を自ら作りだして行ったのである。

そして、約2000名の都内公園に起居する路上生活者を借り上げアパートに移行させた、過去にも先にも例を見ない（福祉保健局が音頭を取り、石原都政の一大プロジェクトにまで押し上げた）「地域生活移行支援事業」（2004年(H16年)～2007年(H19年)度）にのめり込むように協力し、共に働き、初期目標を完遂させることが出来、その後もテント問題で云えば、戸山公園、中央公園のテントゼロを実現し、対策を前進させて来た。

「走り続けた新宿」と云う表現を当時よく使っていたが、とにかく夢中で全力で疾走するのが連絡会

支え結びつこう。

新宿連絡会
新宿野営労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
2006年11月7日 第80期 NOM6
台東区日本橋1-25-11 山崎労働者福祉会館2階
090 (3818) 3450

今日のスケジュール

- 9日(日) 福祉行動 朝日新聞 中央公園 朝日新聞 中央公園 朝日新聞 中央公園 朝日新聞 中央公園
- 10日(水) 馬場パトロール 中央公園パトロール 池袋パトロール
- 12日(金) 中央公園パトロール 午後2時45分～4時
- 14日(日) 救世軍 新宿区 救世軍 新宿区 救世軍 新宿区 救世軍 新宿区
- 15日(月) 福祉行動 朝日新聞 中央公園 朝日新聞 中央公園 朝日新聞 中央公園 朝日新聞 中央公園

の良さである（今は少しくたびれて来たが）。

そんなこんなで、今、NPO新宿で管理している施設が4ヶ所。計75名程が、新宿区内で居られる、部屋なり、ベッドなりを確保するに到っている。他の大きな団体に比すれば、たったの75名であるが、それが宿泊屋ではない我々が、25年のドタバタで培った「施設問題」の力量と云えば、力量である。

まあ、当然ながら、今も路上へのアプローチ続けている。今は週に一度になったが、連絡会のチラシは数え切れない程（45万部は優に越していると思われる）発行し続けている。

連絡会「四種の神器」と云うものがあって、「チラシ」「医療」（班の巡回活動であったり、葉であったり）「食べ物」（昔は炊き出し、アルファ米、今はおにぎりやらカロリーメイトやら）そして「衣類、シャワー」、これらが揃って、連絡会であり、活動の基本でもある路上へのアウトリーチ（巡回、散歩）が成り立っているし、未だ路上に居る仲間との関係を保っている。今は路上生活者数が減少していることもあり、その回数や頻度は一時より減ってはいるが、その代わり、施設では24時間365日のつきあいを変えるがわる毎日のようにしていたり、まあ、それらの人々に囲まれているのは、今も昔も変わらない。

仲間の状態を見つづけ、その刻々と変わるニーズも見つづけ、制度や対策の面の限界を補い、反発するときは全力で反発し、協力するときは全力で協力し、それが正義であろうがなかろうが、その時々の中、より良き方を向きながら、新宿の時には路上生活になってしまうような下層の人々が共に生



きられる居場所を見つけ続けること。

運動は上流から下流へ、そして大海へと流れ着く。いつか、気取って、そんなことを書いたが、まあ、その通りになったと云うことでもある。露出も少なく、叫びもなくもなく、能書きもない、静かな地道な運動の境地は、それはいつかやりたかったものであり、そこにたどり着けた感は達成感があるものである。

運動や活動と云うのは、与えられたその地域で、長くやればやるほど、それに関わった人々の色々な「物語」にもなる。

連絡会自体も「物語」の主演であったり、脇役になったりと、これからも、あちらこちらに鑿められるであろう。

ま、25年は分かったが、これからどうするのか？そんな声が聞こえそうである。

今、地域から外れたところでの露出や、新たな政治的な関係を極力控えていることもあり、我々の活動は地道な日常活動が主となった。日常活動と云うのは地味であり、それを維持するのは、それはそれで苦勞もする。が、かと云って目立つことだけをしていれば良いとは、もう思わない。

当事者の構成も、意識も、発想も、長くやっていると変化をする。もちろん、それに迎合することではないが、そこから見える「ニーズ」なりは、変わって来、そして、景気が回復する中では、大きな経済的な事案がない限り、その数も減っていく。高齢化の中、今や福祉は、「みっともない」人々をどんどんと低廉な場所へ吸い込んでいく。

外国からの観光客が増え、観光都市化すればする程、都市の側もまた変わる。インクルージョンの名の元、「東京の恥部は脇へ脇へ」である。

ある程度自立している路上生活者もまた、都心部から公園、そして、公園から河川敷へと住み処は変わっていく。その人々の「ニーズ」と、未だ都心部に残る人々の「ニーズ」は明らかに分断されており、統一したもの、共通するものは、かつてのよう見いだせない。

たとえば、連絡会のチラシを河川敷の人々に渡したとしても何の共鳴も見いだせないであろう。地域、地域の歴史に根ざした言葉が必要であり、これだけ少なくなった路上生活者が路上生活であるからと、その一点だけで団結するような時代でもない。

どう云う立場の支援であれ、個別での地道な対応が求められている。対策上、もはや東京都のステップアップ方式など、ほとんど意味がなく、集団でまとめて、どこかへ入れる時代でもない。収容政策の発想が残っていたとしても、それは、なりたない時代でもある。

まあ、だからと云って専門家に任せ、我々が身を引くと判断するにはちと早すぎる。

路上生活者を排出する社会の構造が変わらないのであれば、バブル崩壊後、大きな都市問題として現象化した都心の路上生活者が、幾ら減ったとしても、それは只、減ったに過ぎず、都市の側から問題化されなくなった、苦情が少なくなったと云うだけである。「ニーズ」を発し続けて来た、彼、彼女らの生活が向上したのか、そして、都市生活者として同化させることが出来たのかは、またそれとは別問題でもある。

仲間と共にと言いつけて来た我々も、その仲間が少なくなり、やがて路上から居なくなった時、その後は、どうするのか？と云うことを考えなければならないだろう。

「支援」と云うのならシフトする方向は幾らでもある。ホームレスの名を捨て、生活困窮者へと、まあ、それも良いであろう。そして、その発想が広域化して、社会福祉法人のようになったとしても何ら不思議はない。社会事業や福祉の歴史とは、そんなものでもある。

しかし、「共に」と言った時、新宿の路上や公園は、そこに誰も居なくなったとしても、我々だけは見続けたいとも思う。意外と戻って来たりもし、行ったり来たりで彷徨い歩く底辺の人々の道は、決して

一本道ではないのである。何もかも変わったとしても、どこかで、また出会う。

その日のために我々の活動の基本はあまり変わらない。どんな時間帯でも路上に出向き、そこに横たわる人々に声をかける。

「路上から撃て」とか「パトロールで結べ」などと25年前から言い続けているので、我々は今で言う「巡回相談、アウトリーチ」のプロでもあり、パイオニアでもある。

しかし、その基本活動は、ボランティアに重きを置く「野宿者見学ツアー化」としてではなく、また、治安に重きを置く「ガーディアン・エンジェルス化」でもなく、苦情対応に重きを置く行政の「巡回相談化」でもなく、健康、医療に重きを置く見守り、及び相談として、もっと連絡会的な純化は出来そうな気がする。幸いにして連絡会の中では、医療従事者の集まりでもある「医療班」は、今も健在で活動中である（これはまた凄いことであるが）。

年末年始だけではなく、もうちょっと通年的に「日本版サミュ・ソシアル」が出来ないか、もう少ししっかりとシェルターに繋がっていけないものかと、今はそんな課題、構想を持っている。

対象者が固定化していれば、個別の「カルテ」を作り、「処方せん」を立てれば良いのであるが、新宿は極めて流動的なところで、そう云う方式はなかなか通用しない（ネットワーク間で個人情報のやりとりをしなければならないのであるが、そこまでの信頼関係と云うのが実になかったりもする＝組織的な団体でないところが多い）ので、ネットワークは極力小さくしながら、少数精鋭で完結させてしまおう。それを縦横無尽に組み立てて行き、どこかで、誰かが、出会えるようにしていったなら、まあ、面白い活動になるのではないかと夢想をしたりもする。

何事も実験である。幸いにしてシェルター等の施設もあるし、新宿福祉との関係も決して悪くもないし、色々試してみようとは思っているのである。

と、云う具合で、施設であるとか、次のステップであるとか、オリンピック後の就労支援の課題、農

業を軸にした地方との結びつき、高田馬場のたまり場のようなものをもうちょっと広げたい、などの問題意識はもちろんあるのであるが、路上へ、路上へと、そこへの問題意識だけは、人が減っても、何が変わっても、決して変わらずあり続けている。それを持ち続けるのが、連絡会が連絡会である所以なのであろう。

一度大きく作りあげた組織は、その特殊性もあり、時と共に小さくなるのは仕方がない。

共に連絡会を作って来た仲間達も、ここに来て、次々と鬼門に入り、当事者のパワーと云うか、その何とも頼もしいやら、危なっかしいやら、そう云う団体としての「性格、印象」は消えつつある。そう云う個性が作って来たものは、なかなか再生産はされないし、同じことをやっても、それは喜劇にしかならないので、その個性が亡くなることによって、次々と削れていくものなのである。

それでもまあ、何回も脱皮しながらここまでやって来たのであるから、これからも続けられるであろう。

そして、新宿の妖怪のようになり、いずれ都市伝説の一つになっていくのであろう。

まあ、30年目ぐらいまでは、私も何とか頑張りと、総括も出来ると思うのであるが、それ以降となると、あとは、ケセラセラである。

いずれにせよ、この25年間、連絡会活動に協力し、支えて下さった方々、そして、連絡会を作り同胞のためにと奮闘しつづけて来た幾多の仲間達に

(たとえ、声が届かぬかも知れぬが、それでも大きな、大きな声で) 感謝を捧げたい。

一つひとつの出会いが我々の財産である。どっちが支援されているのか分からないような若造の団体は、25年右往左往しながら、ようやくそれなりの団体になりました。と、幾多の仲間達に伝えたい。

そしてまた、昔から、こんな変な団体を支援を下さり続けてくれた支援の方々にも感謝申し上げたい。

新宿に流れ着いた底辺下層の人々が、路上生活になったとしても、施設に入るようになったとしても、どうにかこうにか夢を持ち、希望を持ち、仲間を作り、この地で生きていけるような環境を作り出すことが、結果としてその人々のためになり、そして都市の分断を多少でも和らげることになるかと思うのである。それが、我々が社会に貢献できる道だとも思うし、それは決してラディカルでなく、若々しくもないが、高齢化をする仲間のニーズと共に生きていく我々としては、それはそれで、社会運動の道としては決して間違っていないと思うのである。

連絡会25年。ありがとう、そして、良かつたらこれからも、もうちょっとだけでも見守ってやって下さい。

(了)

●活動カンパ

振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。